

張謇(チョウケン 1853～1926)は、清末より民国初頭にかけて、実業・教育などの方面で活躍した人物である。彼については、すでに多くの研究がなされている。本発表は、張謇が創立した博物館、つまり中国人の手になる最初の博物館＝南通博物苑に着目し、その創設にあたって日本からの影響を明らかにすることの試みである。張謇は1905年から南通博物苑の設立に取り掛かり、1914年ごろには、南通博物苑を総合博物館としてほぼ完成させた。この南通博物苑の創設に当たっては日本の影響が大きかったと考える。それは、張謇が博物館建設直前の1903年来日して各所・各機関を見学していること(それを『癸卯(きぼう)東游日記』として刊行)、また帰国後の1905年に国の博物館建設について上奏した『上南皮相国請京師建設帝国博覧館議』のなかでも「日本の皇室博覧館制度を参考にすべきだ」と建議していたことなどからも窺える。

そこで、博物苑創設にあたって張謇が受けたと考えられる日本からの影響関係について次の三点に整理した。

第一は、それまでに張謇が読んでいたと予想される当時出版されていた日本関係の資料(本発表では省略)、第二は、張謇と日本人との接点、第三は、張謇の日本見学である。

さて第二の日本人との接点であるが、その中でもとりわけ関わりの深かった、天囚西村時彦と木村忠治郎の二人を取り上げた。

天囚西村時彦(1865～1924)は、大阪朝日新聞の記者であり、1900年南京留学の時から張謇と交友をもったと思われる。清国教育の支援者でもあった天囚は、それまでに大阪朝日新聞に数本も清国の教育について寄稿していた。そして張謇来日の折には、彼を各所に案内したり、又大阪朝日新聞と北海タイムスに張謇来日の記事(無署名7編が載っているが、おそらく天囚との関わりで書かれたと考える)を載せたりして、張謇の日本見学に便宜を図っていた。この天囚との交友は張謇の来日と日本実情を知ることには大きな影響を与えたと言ってよい。

木村忠治郎は、1896年に東京高等師範学校を卒業し、嘉納治五郎(1860～1938)の紹介で通州師範学校に行った。彼は、通州師範学校で教習(1904.7～1910.11)をしながら、一方、南通博物苑で顧問をしていた。木村はそこで標本作成の面などで博物館の活動を援助した。東京高等師範学校には附属東京教育博物館があり、そこで木村の学んだ体験が南通博物苑創設の現場で生かされているのではないかと考える。

第三の日本見学であるが、そのなかでもとりわけ第五回内国勸業博覧会と東京皇室博物館・東京教育博物館・小石川植物園・札幌農学校博物館についてその時代の実情を考察した。『癸卯東游日記』によれば、張謇は第五回内国勸業博覧会会場に数回足を運んでおり、また教育機関と農工商機関をあわせて60数ヶ所を精力的に廻っていた。「百聞は一見にしかず」の言にあるように、来日時の体験や見聞が張謇には大きな影響を与えたものと思われる。特に実物が展示されている博覧会や博物館などの体験や見聞は張謇の博物館設立を促進したに違いない。例えば南通博物苑創設にあたって、苑圃と館が一体となる博物館、教育の場・休閒遊樂の場としての博物館づくりに、又博物館の公開性、蒐集方法、地方性等々に影響を与えていたと考えられる。

中国がまだ半植民地の時代、混沌としていた社会のなかで、張謇は上述のような日本からの影響のもとに、そして南通地方の実情と合わせながら取捨選択し、南通博物苑の創設に成功した。このように、張謇は中国における近代博物館の発展の新たな扉を開いたのである。